

「あなたがたに平和があるように」

(ヨハネによる福音書20:19)

復活と訳されている単語には、立ち上がる、起き上がる、という意味が含まれています。復活の出来事は、疲れや悲しみに倒れ、起き上がる力のない人を、神が起こし、再び歩み出す力を与えてくださることの約束です。今日の福音では、ご復活の主イエスが、落胆し、恐れに囚われて打ちひしがれていた弟子たちの前に表れ、起き上がって歩み出す力をお与えになります。今日はヨハネによる福音書において、初めて弟子たちが復活の主イエスに出会う場面でした。この直前の箇所では、マグダラのマリアが主イエスが葬られた墓が空っぽになっていることを発見し、弟子たちにそのことを報告します。しかし弟子らはなんと、そのことを知ると何故だか家に帰ってしまいます。彼らはユダヤ人たちが主イエスの死体を運び出したと考えたのです。彼らの妄想(?)はこうです。「ユダヤ人たちは徹底的にイエスの痕跡をなくそうとしている。となると、ユダヤ人たちが次に狙うのは自分たちに違いない。」そのような恐怖が彼らを襲いました。そんな彼らのご復活すると仰っていた主イエスの約束などどこへやら、帰ってしまうのです。しかし、マグダラのマリアは墓に残りました。そこに主イエスが現れ、彼女のご復活の主イエスと出会います。彼女は急いで弟子たちがいる家へ行き、「わたしは主を見ました」と告げ、主イエスが弟子たちに伝えるようにと言われたことを報告します。そして、ここからが今日の話です。このマリアの報告を聞いた弟子たちはなんと(!)今度は自分たちのいる家の鍵という鍵をすべてかけて籠もってしまうのです。

先程も申し上げたように、彼らには自分たちにいつ迫害の手が及ぶか分からない、という恐怖がありました。恐怖に囚われ、復活など到底信じられなくなってしまっていたのです。恐れは人を支配してしまうからです。何よりも、彼らには最大の恐怖と後悔がありました。それは、主イエスを裏切ってしまった、ということです。あれだけ愛してくださった師匠を裏切ってしまった。そし

て、その師匠は裏切りの果に殺されてしまった。死んでしまったら償いようがない。弟子たちは、この取り返しのつかないとてつもない罪責感にがんじがらめになって、途方もない後悔、恐怖の渦の中におぼれ、呼吸すらできないほどに苦しんでいたに違いありません。「戸を閉ざしていた」というのは、この彼らの状態に他なりません。暗い部屋で子供が布団に潜り込んで恐怖を何とかやり過ごそうとするように、弟子たちは部屋の鍵という鍵を締め、さらには自分たちの心をも閉ざして何とかその恐怖から逃れよう、身を守ろうとしていたのです。

しかし、その彼らの真ん中に主イエスは来てくださいました。「あなたがたに平和があるように。」彼らのすべての恐怖が、後悔が吹き飛んだことでしょうか。弟子たちは「主を見て喜んだ」とあるように、恐怖から一転彼らは喜びで満たされました。「あなたがたに平和があるように。」このたった一言に神の愛が溢れています。「平和があるように」とは、すべての命が、恐れや罪責感、自分や他者を攻撃する様々な感情や力から開放され、互いに命を祝福し合う、そういう世界に人間が生きることを求める神の思いに他なりません。残念ながら、人間の生きる営みから苦しみが消えることはありません。それは再臨の時にようやく成し遂げられることでしょうか。平和とは、わたしたちが痛みや暗闇に留まることがない、ということなのだと思います。主イエスのあらゆる奇跡、そして何よりイエスの復活を見れば、そのことが分かります。人々の身体的、社会的痛みを癒やした主イエスの奇跡は、その人に暗闇から歩みだす力を与えるものでした。人間にとって最大の苦しみの象徴として死があるのであれば、主イエスは復活により、死を超えて起き上がる命を約束してくださいました。それは、愛する人との死別により、悲しみに暮れる人をも立ち上がらせるメッセージです。そして復活は、どうにもならない後悔や罪の呵責へも赦しを宣言し、再び歩みだす力を与えるものでした。そうして、神は主イエスを通して、人間を起こし、再び歩みだす力を与えます。ここに、「あなたがたに平和があるように」と望む神、そして主イエスの深い愛が込めら

れているのです。この「平和」のために、主イエスは十字架に登られ、神は死の先の復活を示されました。どうにもならない後悔、苦しみ、もうお終いだ、という呻き…その象徴である「死」。それらすべてを超えて、そこから起き上がって歩みだす力を、命をくださる。深い闇の中にまで、ご復活の主イエスが来てくださる。そうして罪を赦し、そればかりか、「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」と言って、弟子たちをご自分の働きへと招いてくださる。あれだけ裏切った人間たちを招いてくださるのです。その神の思い、そして具体的に起こしてくださった死と復活の出来事があるからこそ、わたしたちは「あなたがたに平和があるように」という神の思いを受け取り、「平和」がこの身に実現する、体験することができるのです。

「平和」のために、さらに主イエスは弟子たちに息を吹きかけます。これは、創世記で神が人を創造された時、命を吹き込んだあの息吹です。すべての人を清める霊による息吹です。弟子たちの恐怖はこの息吹によって吹き飛ばされました。この神の息吹によって、彼らは今や赦され、新たに創造され、神の赦しをこの世に宣言するために遣わされる新たな命を与えられたのです。この神の側からの一方的な赦しと励ましによってこそ、わたしたちには力が与えられ、平和に生きるために起き上がって歩みだすことができるのです。

人間を暗闇に留め、平和から遠ざける力を持つものの一つに、「疑い」があります。疑いは、人間を暗闇に引き摺り込む強い力を持っています。トマスの疑いはそれを象徴するものです。人間から苦しみがなくなるのと同じように、人から疑いが消えることも、残念ながら無いでしょう。だからこそ、主イエスは疑うトマスのところにも現れてくださいました。トマスは主イエスの復活を疑いました。彼は、復活が事実だということの確証を求めました。そして、傷を見るまで信じないと言うのです。しかし、このトマスにも主イエスは現れてくださいました。そして、ご自分の傷に触れるようにと声をかけられたのです。ここに主イエスの愛の深さを感じずにはられません。

「信じないものではなく、信じるものになりなさい」と言われたトマスは、傷に触れるまでもなく、「わたしの主、わたしの神よ」と言いました。つまり、トマスは主イエスを「神」として信仰告白したのです。これは、それまでどの弟子たちもしなかった信仰告白です。トマスは疑いました。しかし疑いの先に主イエスに出会い、その愛に触れ、主イエスへの深い信仰へと導かれたのです。人間から疑いが消えることはないのかもしれませんが。しかし、トマスのようにそれを主イエスに向けるなら、その疑いは晴らされるのです。なぜなら、主イエスが、人間の疑いを超えてこちらに来てくださるからです。恐怖も苦しみも疑いも、神から人間を遠ざける強い力を持っています。しかし、それらに留まってしまう人間のところに主イエスは来てくださるのです。そして恐れも、疑いもイエスにさらけ出し、叫ぶならば、そこから主イエスはわたしたちを連れ出してくださいませ。なぜなら、主イエスは人間が暗闇にとどまることを望まず、「平和」を望まれるからです。

「見ないのに信じる人は、幸いである。」という言葉は、主イエスを直接目にすることができない今を生きるわたしたちに向かっても語られています。主イエスは弟子たちの真ん中に立たれたように、今、わたしたちの真ん中におられます。そして、わたしたちが後悔の中にあろうと、痛みの中にあろうと、疑いの中にあろうと、「あなたがたに平和があるように」と、わたしたち一人ひとりを祝福し、わたしたち一人ひとりにも神の息吹を注ぎ、新しく生きる命をくださるのです。トマスがそうであったように、たとえ疑いに囚われても、ここにいてくださる主イエスとの交わりに生きるなら、主イエスはわたしたちを「平和」へと導いてくださいます。そうして、わたしたちが主イエスよって起こされ、歩みだしてこそ、「あなたがに平和があるように」という神の願い、神の平和がこの世界に実現するのです。主イエスはここにおられます。今日、ここにいる一人でも多くの人が、このことを「見ないのに信じる」者とされますように。「あなたがたに平和があるように。」という神の願い、思いに与り、感謝して、この礼拝を心からの感謝と賛美をもっておささげ

して参りましょう。